

## 調 査 研 究 彙 報

### 共 同 研 究

**護国寺本諸寺縁起集の研究** 美術工芸・建築・歴史・考古の各部門の協力によって、その逐語的かつ総合的な研究をしようとするものである。昭和51年度は「勝尾寺縁起」の半ばより「法隆寺」項の始めまでの検討を行なった。

**海住山寺文化財の総合調査** 美術工芸研究室と歴史研究室との協同調査。昭和49年度調査の後をうけて実施し、今年度の調査によりいちおうその全調査を完了した。（本文ならびに『海住山寺文化財総合調査目録』参照）

### 美 術 工 芸 研 究 室

**日本美術院彫刻等修理記録の刊行（特別研究）** 本年度は同書のⅢとして奈良県下の東大寺、興福寺等の彫刻等74件について資料の整理を行ない、図解360頁、解説160頁、写真117頁にわたる修理記録を公刊した。なお本巻の刊行に際し興福寺木造千手観音立像（旧食堂本尊）などの調査を行なった。

**東大寺所蔵絵画調査** 本年度は仏画、肖像画が中心で、すでに調査件数は100を超えた。時代的には鎌倉時代から江戸時代までのものがほとんどで、絹本着色 十一面観音来迎図1幅（鎌倉時代）、絹本着色 釈迦三尊及十六羅漢図1幅（南北朝時代）などの作品が注目された。

**奈良県及び周辺の文化財調査** 今まで知られているが詳細な調査が行なわれていないもの、或は未調査のものが中心で、奈良県法輪寺、法起寺、新薬師寺の彫刻、大阪府延命寺の絵画その他の調査を行なった。また文化庁の頭塔石仏の調査に協力した。

**その他の調査** 春に奈良国立博物館で開催された「平安・鎌倉の金銅仏」展、秋に飛鳥資料館で開催された「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」展に出品された作品の調査を行ない、幾つかの新知見を得た。

### 建 造 物 研 究 室

**奈良県民家緊急調査** 奈良県教育委員会に協力して1966年に次いで2回目の調査。前回はおもに18世紀中頃までの古い民家に重点がおかれたが、今回は19世紀までも含めて県内民家の変遷をたどることを主目的とした。（本文参照）1976年度。（上野・中村・松本）

**当麻寺の調査** 東西両塔および金堂・講堂など、おもに昭和初年以前に修理された建造物の調査。明治末年作製の実測図や部材に残る痕跡などにより、修理前と現状との違いをもとに復原的調査を行なった。（本文参照）7月。（岡田・細見・宮本・上野・中村・松本・清水・福田）

**談山神社社殿の調査** 本殿を中心とする境内諸社殿の調査。奈良県教育委員会と協同。（本文参照）7月。（岡田・宮沢・細見・中村・福田）

**神戸北野・山本地区の補足調査** 前年度神戸市に協力して行なった伝統的建造物群調査の補足。9月。（宮沢・宮本・中村・清水）

**五條町並の補足調査** 前年度五條市に協力して行なった伝統的建造物群調査の補足。その成果は『学報30冊』として刊行した。

**般若寺楼門の調査** 叡尊・良恵による文永年間の復興時に建立された門であるが、上層組物はあたかも箱造りの本体に、表面だけ組付けたような特異な技法でつくられている。中世における大工の意匠重視のあらわれが認められ興味ぶかい。10月（工藤・松本・清水）

**円成寺楼門と庭園の調査** 現在上層は大正4年の解体修理時に整備されているが、応仁2年建立以来、尾垂木より上方が未完成のまま、仮葺きの屋根に覆われて伝えられてきたことが明らかになった。なお、大正修理の際発見された墨書の所在は現在不明である。庭園は8月に行なわれた整備後の状態を実測した。10月（工藤・宮本・高瀬・伊東）

**桂離宮建築調査** 桂離宮御殿の解体修理に伴って、諸建物の造営当初の平面、後世の変更箇所、ならびにそれら技法の調査について昨年度に引続き宮内庁に協力した。1976年度。

（鈴木・工藤）

**識名園庭園実測調査** 識名園環境整備委員会よりの依頼。庭園修復前の現況地形実測調査および石垣・育徳泉・橋などの写真測量を行なった。（本文参照）11月～12月。（牛川・木全・伊東・田中・渡辺・高瀬）

**東大寺修二会関係建物の調査** 寛文9年再建の二月堂を根本堂にして参籠所・閻伽井屋など10棟におよぶ建造物群によって構成され、奈良時代以来連綿と続けられている修二会の行事の際にはそれぞれの建物がより有機的に結ばれる。なかでは明治3年完成の茶所、常宿所が最も新しく、現在の景観はその時よりすでに100年の歴史をもっている。1月。（細見・上野・清水・福田）

#### 歴史研究室

**東大寺文書調査** 文化庁よりの委嘱によるもので、1974年度からの継続調査。未成巻文書第1部第24（雑註）721号より、第3部第4（請文）22号までの調査を行なった。また東京大学文学部所蔵東大寺文書の調査ならびに写真撮影を実施した。

**西大寺典籍古文書調査** 従来よりの調査の継続。6月、2月。

**興福寺典籍古文書調査** 文化庁実施の春日版板木調査への協力（11月）の他に、一時中断していた典籍古文書調査を再開実施し、計8函の調査を了えた。10月。

**仁和寺典籍古文書調査** 笈ならびに御経蔵第150函所収文書の調査ならびに写真撮影、および塔中蔵階下収納典籍類第170～180・183函の調査を行なった。3月。

**第2回木簡研究集会** 1977年1月11・12日の両日、平城宮跡発掘調査部資料館会議室において開催された。前回の研究集会により木簡の調査研究の実状や、今後の課題が研究者の共通認識となったが、今回は、この成果を継承し、なお残された諸問題をより解明するために行なわれたものである。参加者は昨年度より若干ふえて47名の大規模な研究集会となった。

第1日目は、木簡をめぐる二三の問題（上智大学 弥永貞三氏）、貢進物荷札について（奈文研 今泉隆雄）第2日目は、漢簡研究の現状（藤枝晃氏）、文書木簡に関する諸問題（奈文研 横田拓

実),飛鳥京跡第51次発掘調査出土の木簡について(京都大学 岸俊男氏, 榎原考古研 菅谷文則氏)の5本の報告を用意した。

弥永報告は, 木簡の縦横比を 計数的に提示し, 日本簡と中国簡の形態の比較を 考察したもの, 今泉報告は, 貢進物荷札の書式, 書風から 木簡がどの段階で書かれたかを問題としたもの, 藤枝報告は, 永年にわたる氏の漢簡研究について 抛るべき資料を中心に要約したもの, 横田報告は, 文書木簡の機能, 性格を文書木簡の分類を通して 解明しようとしたもの, 岸・菅谷報告は, 注目の飛鳥京跡出土の木簡について 出土状況, 伴出遺物, 木簡の形態, 内容などを詳細に報告したものである。

以上の報告にもとづいて, 熱心な質疑討論が行なわれた。研究集会も第2回目を迎えて, ようやく日本における木簡学も研究の第一歩を踏み出したと言えよう。

#### その他の調査

法華寺 3月。 醍醐寺 8月。 高山寺 4・7・12月。 石山寺 7・12月。 大覚寺 4・8月, 1月。 東寺観智院聖教調査 5・9月。 般若寺 11月。

#### 平城宮跡発掘調査部

**法隆寺の発掘** 現在の寺務所の西側に新たに寺務所を建設するための事前調査を奈良県教育委員と協力して実施した。西園院と地藏院の両子院にわたる地域であったが, 後世の攪乱が著しく両者の境界を示すような関連遺構は検出できなかった。おもな遺構として大湯屋東南を限るかと考えられる溝を検出するにとどまった。9月～12月。(森・宮本・岡本・高瀬・安田・巽)

**伯耆国庁の発掘** 国庁の範囲を確認するための第4次調査。内郭は2度大改作がおこなわれており, II期には内郭(東西距離 81m, 南北距離 91m)および外郭(東西距離 273m, さらに東に51mの拡張区がある)を濠で区画していることを明らかにした。倉吉市教育委員会。10月～11月。(佐藤・菅原・山中)

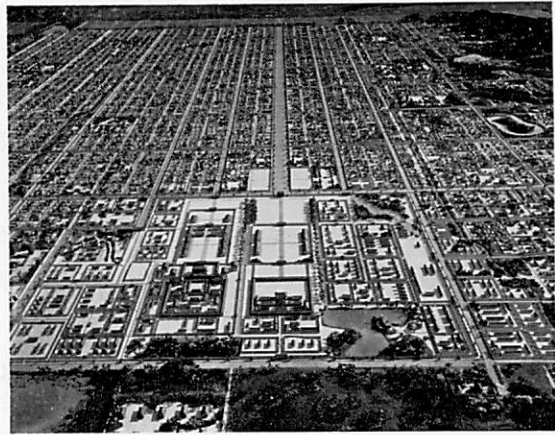
**東海地方出土瓦の調査** 平安時代後期の瓦を中心として名古屋市教育委員会, 小牧市教育委員会, 大府市教育委員会, 東海市平州記念館, 名古屋大学等所蔵の東海地方出土瓦を調査した。安楽寿院への供給など, 多くの知見を得た。11月。(森・岡本・安田・巽)

**金属製遺物の非破壊的方法による材質分析の原理的検討**(科研特定研究・代表者樋口隆康 京都大学) 主として当研究所設置の蛍光X線分析装置を利用する。非破壊的な方法による材質分析なので遺物の表面の分析をすることになり, したがって殆んどの場合, 表面のサビを分析することになる。本研究は, そのような分析値を考古学的研究に利用できる方法を検討し, 開拓しようとするものである。初年度の昭和51年度は, 異なる分析値のクロスチェックを主として行なった。(佐原・沢田・山本・秋山)

**美濃国分寺跡環境整備** 大垣市の依頼により, 発掘調査で明らかになった築地(南面), 回廊(南・西)および, 回廊内の暗渠造成工事の実施計画と指導を行なった。1976年4月～77年3月。(牛川・田中)

**平城京の復原模型** 奈良市の依頼によって平城京復原模型 $\frac{1}{1000}$ の設計を実施し、設計に当っては平城京模型調査委員会（池田源太委員長、岸俊夫、木村博一、横山浩一、鈴木嘉吉、狩野久、高山暹治）の指導を受けた。

模型の規模は東西8.4m、南北6.3m、模型の含む範囲は、東は若草山山頂、西はあやめ池の東、南は大和郡山市下三橋、北は神功皇后陵付近までである。平城宮、条坊および官衙、寺院



平城京復原模型

（26箇寺）、宅地（約7,200戸）、古墳（13基）、河川、条里、京外道路、集落、樹木などは発掘調査の成果と文献資料と遺存地割、地名などに基づいて復原し、地形や個々の建物（約26,000棟）は高さを実際の2割増しにして設計した。

模型は昭和52年2月に完成し、奈良市庁舎1階展示ホールに設置されている。なお、『平城京復原模型記録』が奈良市により刊行された。（宮本・今泉）

**平城宮1/600復原模型** 当模型は昭和39年度に製作されたが、その後の発掘調査の結果、宮城は東に拡張していることが明らかになったため、拡張区の復原模型を増設した。（宮本）

**平城宮跡保存の先覚者たち—北浦定政を中心として—展** 1976年10月23日から11月7日まで、平城宮跡資料館において開催した。

北浦定政（1817～1871）は江戸時代の末に平城京や大和条里の研究を行なった先覚者であり、また、陵墓の調査や修復にも尽力した人物である。この記念展示は、彼の生誕160年を機に「北浦定政顕彰会」が行なった顕彰事業の一つで、当研究所が顕彰会と共催したものである。

展覧にあたっては、平城宮跡保存の先覚者たちの名のもとに、北浦定政を中心とし、明治30年代にはじまる関野貞（1867～1935）、喜田貞吉（1871～1939）らの都城制研究、この研究をうけて明治末年から大正にかけて地元の棚田嘉十郎（1860～1921）、溝辺文四郎（1852～1918）らの宮跡の顕彰、保存運動などに功績のあった人々の業績や遺品などを蒐集展示した。この展示が先覚者たちの業績を改めて認識し、また今後の平城宮跡をはじめ都城制研究の再検討の機会となったことは大きな収穫であった。また、北浦家をはじめ関係者の方々から貴重な資料類を拝借・展示すると同時に、これらをすべてマイクロ撮影することができた。

平城宮跡発掘調査部では、記念展示パンフレット「平城宮跡保存の先覚者たち—北浦定政を中心として—」（A4判、32頁）を作成した。本展覧会の入場者は平城宮跡資料館特別公開入場者ともあわせて9,785名の多数にのぼった。なお、10月23日9時30分から、ご遺族をはじめ関係者参列のもとに、会場の肖像の前で献花式を行ないオープンした。

## 飛鳥資料館

**飛鳥・白鳳の在銘金銅仏展** 9月23日から11月23日までの二ヶ月間にわたり、本年度の特別展示として開催した。国宝1、重要文化財8件を含む11件の作品が展示され、これは飛鳥・白鳳時代の在銘金銅仏13件の大半に当たる。彫刻史・古代史の専門家は勿論のこと一般の人々からも好評であった。本展示に因んで町田甲一（名古屋大学教授）、田辺三郎助（文化庁主任文化財調査官）の両氏による特別講演会を催した。

また、展覧会のカタログを兼ねて図録『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』を刊行し、あわせて展示された11件の作品に法隆寺金銅釈迦三尊像・薬師如来坐像（各国宝）を加え、飛鳥・白鳳の在銘金銅仏の拡大写真集『銘文篇』を刊行した。

**古代墓誌の調査** 52年度特別展示「日本古代の墓誌」展の準備に伴う調査、文禰麻呂墓誌（国宝）、伊福吉部徳足骨蔵器（重文）、小治田安万侶墓誌（重文）、美努岡万連墓誌（重文）、宇治宿禰墓誌など東京国立博物館保管の日本上代の墓誌五点について調査した。2月。

**石造品の模造作製** 山田寺の塔心礎、高取城跡の猿石、高取町光永寺の人頭石の模造を作製し、屋外に展示した。模造の方法は吉備姫王墓の猿石と同様（1976年度年報参照）にしたが、更に混入する石の量を増すなどして堅固にし、風化防止のための工夫をした。

なお人頭石は奈良県文化財保存課の県下石造品調査に関連して発見されたもので、現在光永寺客殿の庭に置かれ手洗鉢として使われている。自然石（花崗岩）の凹凸を利用して壮年の頭部を彫刻している。

## 埋蔵文化財センター

**能代大館遺跡測量図化** 能代市教育委員会は、野代営に擬定される大館遺跡の史跡指定を行なう為の調査の一環として、写真測量による地形図図化を行なった。河岸段丘の先端に土塁・堀・櫓跡などがあり、丹念に補測を行ない、それらを明瞭に表現するよう図化の指導・監督にあたった。能代市教育委員会。6月。（木全・田辺）

**熊野磨崖仏の写真測量** 大分県豊後高田市田染にある磨崖仏、大日如来（国宝、高さ7m）と不動明王（重文、高さ9m）の調査。大日如来の保存修理工事にさきだって、写真測量により現状記録をし、あわせて二像が彫られている岩石の経年移動量を知るための基準点埋設、及び計測。豊後高田市教育委員会。7月。（伊東・西村・田辺・亀井）

**立洞2号墳の写真測量調査** 立洞2号墳は福井県敦賀市にある径25m、高さ3mの円墳で、北陸縦貫道建設予定地にかかるため、福井県教委が発掘調査を実施した。同教委の依頼をうけ、墳丘の立面図を作成する目的で、写真測量調査を行なった。福井県教育委員会。8月。

（伊東・西村・亀井）

**大山廃寺の調査** 塔跡以外の堂宇探索を目的とした調査。七間四方と三間四方の礎石建物を検出。いずれも中世に再建された建物で、古代の堂宇は平安後期に焼失したことを確認。奈良〜鎌倉期の瓦・土器類・蓮華文鬼瓦・風鐸等が出土。小牧市教育委員会。8月。（山中）

**横滝山廃寺の発掘** 新潟県三島郡寺泊町所在。鴟尾片、瓦等の出土、礎石様の石の存在から、小丘陵上の平坦面が寺院の跡と推定されていた。遺構確認のため、発掘調査を実施。建物基壇外縁とみられる切石列の一部を検出した。建物の規模、性格については、今後の調査を待つ。寺泊町教育委員会。8月。(岩本圭)

**黒笹7号古窯保存対策** 愛知県愛知郡東郷町にある黒笹7号古窯の保存指導。窯は、天井部が一部残存しており、数年前に覆屋が設置されたが、その後崩壊が進行している。今回は、合成樹脂等による土質の補強・強化など保存対策について指導した。東郷町教育委員会。8、10月。(秋山)

**達谷窟磨崖仏の調査** 岩手県平泉町にある推定鎌倉時代の磨崖仏(高さ9m)について、同町教育委員会より現状記録方法と、今後の保存処置法の検討を依頼されたもの。岩石の一部に樹脂を塗付し、越冬後の変化を観察する資料とした。平泉町教育委員会。11月。(木全・西村)

**美作国分寺跡の調査** 美作国分寺跡の範囲確認発掘調査と、整備事業にともない、推定寺域を中心に、0.13km<sup>2</sup>の区域の地形図(縮尺1/500)を作成するに先だって、基準点埋設作業の指導にあたった。なお今年度小規模な発掘調査も実施され、建物の基壇の一部が検出された。津山市教育委員会。11、3月。(伊東・田辺)

**座喜味城石垣写真測量調査** 沖縄県読谷村、座喜味城跡の整備、修復にともない、城壁の写真測量調査を行なった。この調査は1974年からの継続で、今回で城跡の西半分、二の丸地区の調査をほぼ完了した。12月。(木全・伊東・田中・高瀬・渡辺)

**周防国府の調査** 周防国府の範囲については、西北隅と西南隅が一応確認されていたが、今回は南限東部の確認調査であった。「船所」・「浜の宮」の字名の残る地点である。総柱の掘立柱建物などを検出したが、南限線については、明確な遺構は検出できなかった。防府市教育委員会。2月～3月。(田辺・工楽・佐原・伊東・山中)

**埋蔵文化財に関する実態調査** 埋蔵文化財関係情報資料収集の活動の一環として、各種の実態調査を継続的に行なっているが、本年度は、各都道府県における写真測量の利用状況と、全国市町村の埋蔵文化財に関する現状調査を行なった。写真測量関係の調査結果については、『埋蔵文化財ニュース』7に掲載した。(田辺)

**航空写真の管理と活用** 日本写真測量学会と日本土木学会の依頼をうけ、現在当研究所は、昭和30年から昭和40年にかけて撮影された航空写真を約3,000缶、件数にしておよそ、12,000件保管しているが、これの管理活用をはかるため、リスト作成をめざし、標定図の整理作業を行なった。なおこの作業は、昭和49年に発行されたリストIに継続するものである。(伊東)

**遺構の埋蔵環境と劣化現象ならびに保存処理に関する研究** 遺構を現場で露出したままの状態で保存するための基礎的な研究と、その保存技術の開発を目的とし、昭和51年度から三年計画で遂行予定。初年度には、主として凝灰岩質遺構の風化と埋蔵環境特に水質との関係について検討した。(横山・町田・工楽・沢田・山中・光谷・秋山)